

東京都渋谷公園通りギャラリー

交流プログラム 「渋谷ラジオ」

令和6年度番組 「展覧会のあと」

ゲスト5：米田昌功さんをお招きした回のうち、#21のテキストです。

○河原 アール・ブリュットの話にちょっと戻っちゃうんですけど、アール・ブリュットという言葉を出したデュビュッフェが、アカデミックな、先ほどから出ている技術とか伝統的な表現みたいな格式張ったものを否定するような形でアール・ブリュットというふうに、自分の中で指針になるような表現を集めていったみたいなのところがあって、今回、風景というテーマは、アカデミックな絵画の序列的にも割と低いほうみたいなんですけど、歴史画とか肖像画、風俗画みたいな並びでいうと、風景画はそんなに格式張り過ぎてもないということみたいなんですけど、やはり、遠近法とか写實的に描くみたいな、そういうアカデミックをイメージさせるようなものが風景画にあるなと思っていて、今回出展していただいている方々はそういった風景画のイメージを超えてくるというか、そういうことをしないで、独自の考えというか技術で、彼らの持つ技術で風景画を描いているところが、風景画という割と取っつきやすいイメージのものを入り口にして、そうじゃないものを見せるみたいなのところでアール・ブリュットの魅力を伝えたいなというのもありまして、磯野さんはぴったりだったという。(笑)

○米田 いや、ぴったりですよ。何かね、建物とか街とかって人が造ったものですから、ある程度何かセオリーとかね、そういうのがあっての話なんですけど、皆さんそういうの、何か想像を超えた視点を持っていらっしゃるというか。(笑) 辻さんもそうですし、古久保さんも。

○河原 そうですね。皆さん、さっき米田さんも言っていたんですけど、自然発生だけではないみたいな。その作品というのが自然発生的にできるわけじゃなくて、その人との関係であったり、環境によって構築されていくみたいなお話がすごく印象的で、この「こだま返る風景」展のときも、僕はもともと自然発生的に生み出ているものというイメージで作品を見させていただいたり、お話を聞いていたんですけど、やっぱりそれぞれに背景が、何うと少し周りにいた家族とか先生とかがちょっとアドバイスしたり、こうしたらみたいなのところで、ぼんとブラッシュアップしていったりだとか、実はこっそり描いたものがすごくたまっていて、捨てられちゃう可能性もあったものなんですけど、出してみ

たらすごかったみたいなことであったり、磯野さんの場合も、そういう環境であったり家族、まあ、米田さんがいたから見せに来たと思うんですけど、そういう作家と周りの人の関係性が非常に豊かで、だからこそいろんな人に見てもらえた、日の目を見たみたいな作品が結構ほとんどで、そういう視点というのは、アール・ブリュットっていう言葉が出てきた頃と比べると、より日本的なのかもしれないんですけど、すごく重要なキーワードなのかなというのを、展覧会をつくりながら思っていました。その関係性であったり、今日結構出てきている環境みたいなところというのは、すごく作家にとって重要だなと。

○米田 アール・ブリュットの背景には、創作の現場にも作品が社会と接する境界の場所にも必ずやっぱり第三者がいて、その作品を愛する人というか評価する人というのは必ず介在しているというのは、障害者アートの世界での特徴。一般の美術とかだと、セルフプロデュースというのがすごく強い面があるんだけど、そういう意味では「発表の美術」じゃなくて、障害者アートって「発見の美術」みたいな位置づけなんだと思っているんですよ、私。

○河原 発表ではなく、発見であると。

○米田 誰かが見つけているというか、常に。こういうのを言ったら、大概発表のほうに軸足がある作品だと、何かちょっと弱かったりとか。(笑)

○河原 その発表に向けてしまいますもんね。

○米田 そうそう。

○河原 こういうやつだといいかもなというところに引っ張られてしまいますよね、作品が。

○米田 それが、本人にしろ、周囲の人にしろ、何かそういうところがあると、本当のアール・ブリュットが、今までアール・ブリュットの作品を見て感じていたようなエネルギーというのはあまり感じられなかったりするんですね。それで、話を聞いてみると、実はそうだったみたいなことが結構あったりとかして。やっぱりそれって、さっき言った創作の現場の話にもなるんですけど、そこで何を軸にしていくかというのは、やっぱりこれだけブームになると、きっと難しいところなんだろうなというのが。

○河原 何でもかんでもとかっていうことにはできないですもんね。これだけたくさん、いろんなところから作品が生まれるというか。

○米田 やっぱり活躍してほしいと思うし、周りの人は。

○河原 展覧会を今回したわけなんですけど、展覧会というのは社会との接点というふう

によく言われるなと思うんですけど、米田さんの的にはどうですか。展覧会の規模感とか種類とかももちろんいろいろあるとは思うんですけど、展覧会によってアール・ブリュットの作品なり、作家を紹介していくことってというのは、何か。

○米田 そうですね、いや、もう本当に、作品はやっぱり見る人がいてこの世に存在するものなんじゃないかなという。ヘンリー・ダーガーだって、あのまんまアパートを壊されていたら。(笑)

○河原 (笑) そうですね。誰も見つけずに、ばーっと燃やされて。

○米田 そうそう、単なる掃除していた人みたいな感じになってしまうから。だから、じゃあ接して何が起きるかという、例えば、これはココペリというか、ばーとというかセンターとしてやっていた事業なんですけど、高岡市の方がすごくこういうアール・ブリュットの世界に当初から関心を持っていて、すぐ予算をつけたんですよ、普及の予算を。それで展覧会をやってきたんですけど、それと一緒に、小学校での巡回展というのもやっていたんです。

○河原 えー、すごいですね。

○米田 そこに、やっぱりさっき言った展覧会で借りた作品をそのまま持って行って、やまなみとか愛知とか、いろんなところの多様な作品、多分教科書に載っていないような作品ばかりですよ。いわゆるテクニクとかも、多分今までにないようなものばかり。それを持って行って、どうしたか、どういうワークショップをやったかという、鑑賞の時間をたっぷり取って、自分の好きな作品を1個選んで、それに題名をつけるというワークショップを毎回やっていたんですよ。

○河原 楽しいですね。

○米田 題名をつけることで作品を真剣に皆さん見てくれるようになるし、どうして題名をつけたかということ、その後、みんなで会話することによって、見る人によって全部違うんだっていうのが分かってくるんですよ。じゃあ、作品を見るということはどういうことかという、作家が作った作品というのは、明らかにこの世で1個存在しているんだけど、その鑑賞者が現れることによって、もう1個作品が増えることなんだというのが分かってくるんですよ、世界に。それが10人いれば、その作品が実は10通り生まれるということが分かってきて、そういうふうにして作品自体も人それぞれによって1つしかないものだし、見る人によってもとつても本当に世界に1つしかないものというのを実感できる時間になるというか、巡回展というのが。そういう表現というのは、その人と本当に

密接に関わっていて、世界に1つしかないというものを実感できる、そういう体験っていうのがアートの1つの役割ではないかと、1つしかない大事なものなんだというのを味わえるというのは。

結構、最初はそこまでの意図はなくて、何か楽しくて盛り上がるかなぐらいので始めたやつだったんですけど、話をしていると本当にみんな感じ方が違って、特に具象物が描いてあるとそんなにかけ離れたものではなくなるんだけど、例えば虎が描いてある絵を見たにしても、それに込める物語って、みんな自分のバックボーンが反映されるから、全部違うんですよ。子供でもそうなんやというのがすごくびっくりして。絵の見方ってきつこうなんだよね。だから、いわゆるこれまでの美術の見方だと、ある程度予備知識というものに沿って、作家の意図というのをこっちが酌み取って見なきゃならないみたいなような鑑賞の仕方が一般的だったけれども、でも、こういうふうにすることで、実は作品も作家も鑑賞者も一緒に豊かになっていくという状況をつくれるんだなというのがすごく分かって、本来の鑑賞というのはこうなんだなというのを、私自身が子供の反応を見て学んだといいますか、そういうことがあったんですよ。

だから、作品を鑑賞者が現れて見るというのは、本当に社会との接点の最初の入り口というか。なので、なら、その作品と接した人が、その後、それを咀嚼して、無意識に中にため込んでいって、いつかそれがもしかしたら役に立つかもしれないということを期待できるといいますか、障害者アート、多分これが名作とかだと、そこまでみんな乗れないんじゃないかなと思うんですよ、子供たちが。障害者アートだからみんな入っていけるし、「何だろう、これ」っていう。先生方もやっぱり食いつきが全然違うって言うんですよ。

○河原 なるほど。

○米田 作品に対する食いつきが。それがもう驚くということも言われますし。

○河原 結構そのメカニズムみたいなのがすごく気になりますね。何か画材が、比較的扱いやすい画材が多かったりとか、題材も抽象化されている実在のものとか、ちょっとそこから想像の動物とか、そういう空想上のものもあると思うんですけど、何か人の表現の根幹部分に触れてくる何かがあるということですよ。

○米田 「でんちゅうでんせん」も定番で、いつも飾りました。

○河原 あっ、そうですか。

○米田 一応スタッフが白手をつけて、こうやってめくって見せてあげるような形でやったんですけど、やっぱり子供たちのそのときの興味、関心って、そうじゃないページがあ

るんじゃないかというのを探すんですよ。

○河原 ああ、なるほど。

○米田 何か違うことが、アクシデントというかハプニングが起きるんじゃないかなと思
っているような。(笑)

○河原 (笑) バグを探す感じですね。

○米田 急にキャラクターが出てきたりとか。だけど、全部が電柱だということに、終わ
ってから啞然とするんですよ、みんな。(笑)

○河原 (笑) 何かその表情をちょっと今思い浮かべても笑えますね。そんなことがあ
るはずないという感じで見ているわけですね。

○米田 そう。それで、これを1人が3か月で描いたということ、後で物語を聞いて、
電柱は自分はこんな簡単に描けるけど、できるかっていったら、できない。好きとい
うことの1つの姿を、もう一回新たな姿を見るというか、愛情というものの形を1つ新しく
皆さん増やすことができるというか。だから、そういう意味でも、障害のある方の美術を
外に見せていくというのは、多分健全な社会に近づくためにすごく必要なことだと私は思
っています。(笑)

○河原 すごく重要な。

○米田 はい。

○河原 まあ、展覧会というのが、作品を見る場だけでなく、まず1ついろんな人が出
会う場であって、そこで起こるコミュニケーションとか、気づいたこととか、見た人が感
じる何かみたいなのが非常に重要というか、結構ココペリの活動も、場をつくったり
きっかけをつくる仕組みを提供したりすることで、そこに人がわっと入り込んで、うごめ
いているような感じだと思うんですけど。

○米田 そうですね。

○河原 そういう展覧会の考え方とも共通しているというか、1つの場としての展覧会と
いうのが、すごく今のお話で通ずるものがあるなと感じました。まさにそういう展覧会と
か美術館というのは、今後やっていかないと個人的にもすごく感じていますよ。ただ
もう何かを置いて、それを見る場所ではなく、人々がうろうろして、ざわざわしていられ
る場所みたいな。

○米田 本当にそうですね。

○河原 そういうところになっていくといいのかなとは、やっぱり思いますね。

—了—